

國學院大學學術情報リポジトリ

コメント二

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 元葵, 三浦, 夕佳, 小松, 遥, 森下, 陽向 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001521

《コメント二》

清水 元葵 三浦 夕佳
小松 遥 森下 陽向

【清水(元)・三浦・小松・森下】こんにちは。

【清水(元)】第七回「渋谷区長への施策提言コンペ」区長賞受賞チームの法学部法律学科、清水元葵です。

【三浦】法学部法律学科、三浦夕佳です。

【小松】文学部史学科、小松遥です。

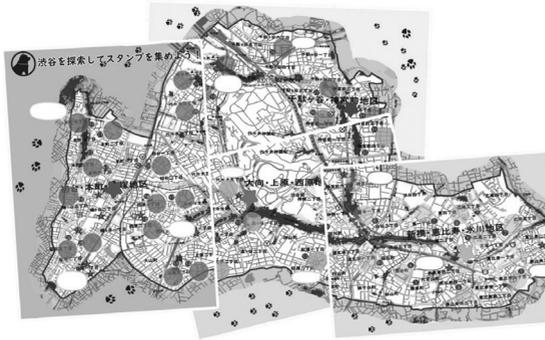
【森下】文学部日本文学科、森下陽向です。

【清水(元)】先ほどの内容を受けて、コメントをさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

学生による「渋谷区長への施策提言コンペ」

【森下】私たちからは、はじめに自己紹介として、「渋谷区長への施策提言コンペ」について紹介させていただいた後、「渋谷の落書きとアートのあいだ」の本編について、さらに落書きをなくす活動の有効性についてお話をさせていただきます。

まず、「渋谷区長への施策提言コンペ」についてです。本コンペは、渋谷区の課題に対して、学生ならではの目線で解決への提言を行なうものです〔本コメントの学生は令和五(二〇二三)年度第七回「渋谷区長への施策提言コンペ」において

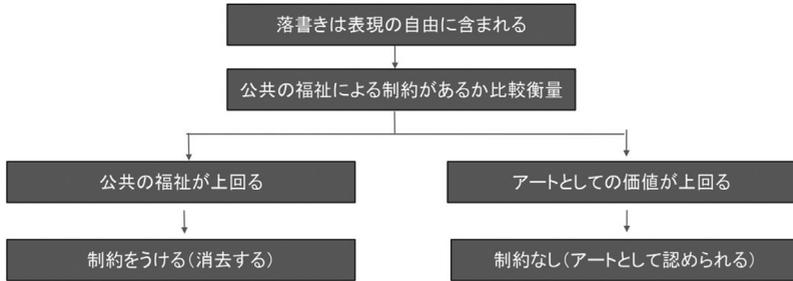


【図2】 政策提言としてのスタンプラリー
(小松遼氏提供)

施策提言を行なった」。区は新たな気づきを、学生は実社会の課題における提言を通して経験、教育の向上を期待する趣旨のもと、直接ご意見などを伺える非常に貴重な体験をさせていただきました。そのコンペで考えさせていただいた題材は、「おとなりサンデー」の視点を活用し、地域コミュニティの維持や活性化のためにできることでした。その内容については、今回の「しぶカフェ」の題材でもある「持続可能なまちづくり」にも関係しますので、少し紹介させていただきます。

その前に、「おとなりサンデー」についてご紹介いたします。「おとなりサンデー」の()起源はフランスの「隣人祭り」(隣人の日: Fête de voisins)にあります。近所の人たちと顔見知りであれば、孤独死のような悲しい事件も減らせるのではないかという趣旨のもとで、平成十一(一九九九)年から開催された交流イベントです。渋谷でも同じ趣旨を掲げて、強化月間である六月の第一日曜日には各地で区民による様々な企画が実施されています(第一回は平成二十九(二〇一七)年六月四日に開催。三十八団体が催し物を出し合った)。

そのための具体的な企画として提言させていただいたのが、【図2】のスタンプラリーです。企画者の方々と協力し、各所にスタンプを設置させていただくことで、地域の人々との自然な交流を促し、さらに(スタンプラリーに)洪水耐震ハザードマップの要素を盛り込むことで、楽しみながら、同時に災害時に意識すべき場所を頭にとどめてもらう機会にできるの



公共の福祉...人権相互の矛盾・衝突を調整するための原理(すべての人権に必然的に内在する)

【図3】 落書きとアートの違いに関するフローチャート
(三浦夕佳氏作成)

ではないかと考えました。

「おとなりサンデー」への参加者が増えれば、企画開催者も増加し、それによってイベントへの参加意欲が向上することで、さらに参加者が増加するというサイクルの形成が期待できます。このサイクルによって、イベントを継続可能なものにするだけではなく、地域コミュニティによって、イベントを強化することもできるのではないのでしょうか。加えて、交流というのは、災害時のような非常時において重要とされる「共助」にもつながります。地域コミュニティの活用の一例を具体的に意識することができるものとして、提言をさせていただきます。

本編へのコメント

【三浦】ここからは、本編についてのコメントを述べさせていただきます。まず印象に残ったのは、トークセッションの際に傍嶋さんが、「壁を白くすることを芸術と捉えている」と指摘された点です。

落書きとアートの幅広さやその違いをどのように考えるかという点については、とても難しい論点だと感じました。私たちは法律を勉強しているので、今回のお話を法律的な観点から【図3】のようなフローチャートにしてみました。落書きも何かを表現するという行為ですから、表現の自由として守ら

れている権利です。しかし、権利も公共の福祉によって制限される場合があります。治安が悪くなるなど、公共の福祉がそれを上回る場合は制約を受けます。反対に、アートとしての価値が上回ると、皆さんもご存じのバンクシーの作品などのように、制約を受けません。

次に、今回のテーマにもある「持続可能なまちづくり」についてです。SDGsは、持続不可能といわれている社会を持続可能にするために、環境問題や貧困、人権問題などを項目別に解決しようという目標のことです。落書きを消すことをどのように持続可能性につなげるのか。これは難しい課題ですが、様々な視点から考えることができると思います。そこで、私たちはどのような面を重視したいのか、また、渋谷区をより一層持続可能な「まち」にするために提案できることは何かという点について考えてみました。

【小松】まず、傍嶋さんの落書きをなくす活動の有効性について、安全なまちづくりとコミュニティという視点から考えました。あわせて、先ほど述べた持続可能性との関連性についても触れていきます。

この(落書きをなくす)活動が一人ではなく、住民や学生による参加型の活動であることが重要だと考えられます。その活動を行なうためには、そのための新しいコミュニティの結成が必要です。活動をより効果的に行なうために、そのコミュニティ内で暮らしやすい「まち」について考えるきっかけがつけられるのではないのでしょうか。そして、実際に自分たちが活動を行なうことで、その地域や街並みへの愛着が形成されると思います。この愛着というのがまちづくりとコミュニティの強化において最も重要であり、落書きをなくす参加型の活動はその点でよい影響を与えると考えます。こうした活動が街並みの持続可能性につながっていくともいえるでしょう。

次に、SDGsとの関連性についても見ていきます。SDGsのゴール十一番には「住み続けられるまちづくりを」と掲げられています。都市と人間の居住地を包括的、安全、強靱かつ持続可能なものにするには、東京の中でも多

くの人が訪れる一方で、多くの人が暮らす「まち」でもある渋谷区の取り組みとしては大変重要なのではないだろうか。落書きに関する活動をきっかけに、住民の落書きを防止するという意識を高め、落書きのない渋谷にすることで、犯罪が起きにくい「まち」への形成へとつながります。犯罪の減少、安全な暮らしの確保という意味では、こちらが「命の持続可能性」「社会の持続可能性」に結びつき、特に渋谷区が力を入れて取り組んでいる子育て支援という面(たとえば、令和三(二〇二二)年七月二十七日に開設された渋谷区子育てネウボラなど)にもよい影響が出るのではないかと考えました。

【清水(二元)】SDGsのゴール十一番だけではなく、私たちが考えるその他の有効性、とりわけ、人々の結びつきとSDGsへの効果についてお話したいと思います。

先ほど傍嶋さんは、いろいろな人に関わって作品をつくるとおっしゃっていました。そこでは、令和四(二〇二二)年八月から十月にかけて渋谷区障害者団体連合会が壁画制作のワークショップを開いて、障がい者団体の方と一緒に壁画をつくったという話がされていたかと思えます。このような取り組みによって、多様性の認識と理解であったり、共生社会の実現が可能になったりして、結果として人々の結びつきの拡大や強化というものが行なわれると思えます。

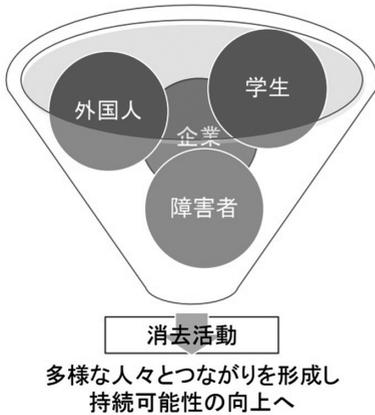
ところで、この人々の結びつきが強化されることによって、「多様性の認識と理解」「共生社会の実現」以外にどのような効果があったのかについて考えたことはあるでしょうか。もしかしたら、「人々の結びつきが促進する」ということである」という一般的な理解に捉われてしまい、それ以降について考えない方も多いのではないのでしょうか。この人々の結びつきが及ぼす効果について、ここからは、ロバート・パットナム (Robert D. Putnam, 1941, アメリカの政治学者)の提唱したソーシャルキャピタル(社会関係資本)をもとに考えていきたいと思います。

ソーシャルキャピタルとは、社会や地域における人々の信頼関係や結びつきのことです。パットナムは『哲学する

民主主義—伝統と改革の市民的構造—』(NTT出版、平成十四(二〇〇一)年、原著は*Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, 1993)という本の中で、イタリアの北側と南側で州政府の効率性〔行政上のサービスと市民生活〕に違いがあることを論じました。この研究は、北側と南側で効率性の異なる背景として、北側は水平的な平等、水平的なコミュニティがかなり発達していたのに対して、南側は上下関係のはっきりした形のコミュニティが形成されていた状況があり、その結果として、住民の間に水平的なコミュニティがあつたほうが効率のよい政治ができるということを示したものです。その後、様々な研究者がソーシャルキャピタルについて研究をした結果、ソーシャルキャピタルがもたらす影響の事例をとっても多く見つけることができました。ここでは、その中の一部でSDGsに関係するものをご紹介します。と思っています。

ソーシャルキャピタルがもたらす影響としてまず挙げられるのは、「地域社会への影響」です。孤立した人をつくらない、包容力のある社会をつくることができるので、一体感が醸成されたり、犯罪の抑制に良い影響があつたり、あるいは防災意識の高まりというものも期待されます。また、「健康増進」という点では、社会的なつながりと平均余命の長さにも良い影響があるとされています。あるいは、「教育」の観点では、年齢等を問わずに学習体験の機会が広がるようなことも報告されています。このように、SDGsのゴール十一番だけではなく、ゴール十番(人や国の不平等をなくそう)、ゴール三番(すべての人に健康と福祉を)、ゴール四番(質の高い教育をみんなに)のようなところにも派生してよい影響がもたらされるのではないかなと私たちは考えています。

最後に、私たちからこの落書き消去の活動に関して一つ提言をさせていただきますたいのは、一度に多様な人々と出会える落書き消去のような活動が、持続可能性のさらなる向上という点においても、住民の間の水平的なコミュニティの形成という点においても、とても重要であるということです。【図4】にあるとおり、渋谷区内に住んでいる住民



【図4】落書き消去に携わるアクター
(清水元葵氏作成)

や外国人、学生、障がい者の方、企業など、いろいろな場所に所属している人たち全員で活動することによって、コミュニティの強化が図られるのではないかと考えられるわけです。この結びつきによって孤立感を消去することができます。共生社会に持つていくこともできますし、孤立感の消去が犯罪の抑制にもつながりますし、災害時などの「共助」の強化、健康の増進、多面的な教育や寛容性、考える力の向上などの点で、とてもよい影響があるのではないかと思います。

ただ一方で、このような大きなイベントを簡単に行なうことはできないと思いますので、一つの例として、私たちが提案させていただいた「おとなりサンデー」のイベントの中に組み込むなど、既存のイベントの中に組み込むことによって、ある程度コストを下げて実現することができるのではないかと考えています。このように、人々の結びつきによって住民ベースで持続可能性を向上させることが、この落書き消去活動を実施することにより可能になると思います。

以上で私たちのコメントを終わりにさせていただきます。ありがとうございます。